

山梨県の近代民家建築についての研究

建設工学専攻

建築史研究

ME14022 小澤 宣之

指導教員：伊藤 洋子 教授

1 はじめに

1.1 研究背景と目的

明治元年から昭和戦前期までの間に日本の伝統的技法で建てられた建築物は、木造建築技術の水準が最高点に達した時代を反映する。取り分け民家建築は地域色を残しつつ、近代の流れを受けた形態へと発展していった。

山梨県は養蚕や果樹などの特産物が豊富であり、民家建築は生業の影響を受けて形成されている。さらに近代という時代も相まって多様な特徴を持つ建築が見られることから、その特徴を抽出し明らかにすることを目的とする。

1.2 研究の流れ

- ・2013 から 2014 年にかけて山梨県近代和風建築総合調査として実測調査を実施し、データを収集。(表 1) なお、学術研究にて家屋名を出す許可を得ている。
- ・平面的特徴を抽出するため、平面図を作成し、調査で得た写真などを基に意匠的側面の特徴を見出す。
- ・山梨県における近代以前の民家建築について文献調査を行い、近代の民家への発展の仕方を、作成した平面図や意匠的特徴から考察する。

表 1 研究対象の民家建築

No	建物名	年代	構造	所在地	用途
1	穂坂家	弘化3年以前	木造平屋建・切妻造	南アルプス市	養蚕農家
2	網蔵家	元治2年か	木造平屋建・切妻造	甲斐市志田	地主農家
3	土屋家	明治初期	木造2階建・切妻造	甲州市塩山	養蚕・醸造業
4	名取家	幕末から明治初年	木造2階建・寄棟造	南アルプス市	醸造業
5	芦澤家	明治5、6年ごろ	木造2階建・入母屋造	笛吹市春日居町	養蚕農家
6	中込家	明治32年	木造2階建・入母屋造	南巨摩郡富士川町	醸造業
7	内藤家	明治33年以降	木造平屋建・入母屋造	南アルプス市	醸造業
8	石川家	明治40年	木造平屋建・寄棟造	甲府市城東	商家
9	川口家	大正末から昭和初期	木造2階建・入母屋造	早川町新倉	住宅

2 山梨県の近代以前の民家建築について

山梨県は豊富な特産物とそれに伴った生業が特徴的であり、それらが民家建築の近代化の過程でどのような影響を与えたかを述べる。並びに山梨県における近代の民家建築へと繋がる近代以前の民家の特徴を示す。

2.1 近世民家建築の平面形式

山梨県における近代以前の民家の平面形式について、変遷を表2に示す。近世初期の民家は広い土間を持ち、土間の隣四室を板敷の床上とする。床上の田の字割の表側は二室続きの座敷、その裏側は居間とナンドとなっている。18世紀中期から幕末に、接客部分の座敷を表側に二室とる前座敷型と、上手妻側に二室とって表のナカノマから鍵型に三室続ける、鍵座敷型が普及していった。その後は鍵座敷型が主流となって明治期に入り、六間取が展開していった。

表 2 山梨県近世民家の平面の変遷

時期	変化
江戸初期～17世紀後期	広い土間を持つ、床上部分が田の字割
17世紀末～18世紀前期	広い板間の居間を土間寄付きの前側にとる
18世紀中期～幕末	内馬屋の縮小、土間の座敷寄りに一間幅の板間を設け、後にそれが拡大していく
	接客部分が二～三室続く構成となり、鍵座敷型と前座敷型が普及する
	前座敷型のもも次第に鍵座敷型へ移行
明治期以降	六間取が展開する

2.2 生業と民家建築への影響

民家建築の形態に大きく関わる生業に養蚕が挙げられる。養蚕の工程のうち稚蚕は土間寄付きの居間で行われていた。高温多湿な環境が必要なため、可動式の間仕切りが使われ



図 1 土屋家主屋の腰屋根

る傾向にある。その後の工程である上簇のための空間として、多くは1階の天井を簀の子天井にした屋根裏が使われていた。屋根裏の風通しのために、腰屋根を載せたり、一部を突き上げ屋根にしたりする例が多く現れる。

その他に、山梨県は近代における小作地率が高い特徴があり、発達した地主農家が大規模な敷地を活かした屋敷を建築することが挙げられる。

3 山梨県の近代民家建築

実測調査を行った山梨県の近代民家建築について、平面形式を中心に近代以前からの変化を含め、特徴を見出し明らかにしていく。

表 3 穂坂家住宅 (表 1 中 No. 1)

穂坂家：木造平屋建・切妻造 (弘化3年以前)

概要：社家の住宅だが、養蚕も行っており、屋根裏を利用していた。現在の西側に存在する六室のうち、土間寄りの二室は元来板間であり、整形四間取の形態である。	
分析：南西の座敷は北側に床の間と付書院がつく。この北側にナンドがあるが、南西の座敷と繋がる続き座敷であったと見られる。	

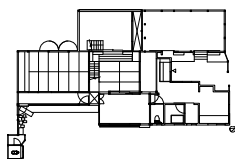
表 4 網蔵家住宅 (表 1 中 No. 2)

網蔵家：木造平屋建・切妻造 (元治2年)

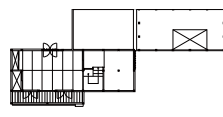
概要：当家の耕作地に隣接した地主農家で、敷地は相当な広さを持ち、往還に向かって海鼠堀と土蔵造りの建物が建ち並ぶ。敷地内には質蔵・雑穀蔵・味噌蔵など多くの建物が軒を連ねる。現在の台所など水周りは改造されているが、表側は改変はあまり見られない。六間取の形式に、土間から一番遠い位置に床の間、付書院を持つ座敷を置く。	
分析：主屋自体は元治2年の建築であり、間取も通土間に六間取という伝統的な形をとっている。蔵座敷が明治40年に建てられ、その後に水周りや繋ぎの間の増築されていたと考えられる。	

表5 名取家住宅（表1中No.4）

名取家：木造2階・寄棟造 一部切妻造（幕末～明治初年）



現1階平面図



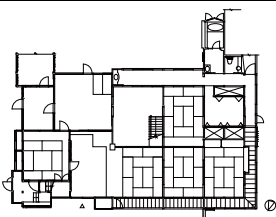
現2階平面図

概要：農業地帯が広がる中にある醸造を営む民家であり、家主は近世からの有力者である。敷地内には酒蔵、穀蔵、味噌蔵、文庫蔵のほか、精米所、門などの付属建築や主屋の正面に広がる庭がある。

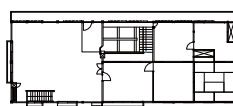
分析：意匠的特徴として、イマと呼ばれる主屋2階座敷にある欄干、吊束と欄間の意匠が挙げられる。木製建具と欄間は青色に、欄干の手摺と吊束は白色に塗装された意匠が取り入れられており、擬洋風の影響を受けていると思われる。

表6 芦澤家住宅（表1中No.5）

芦澤家：木造2階建・入母屋造（明治5,6年ごろ）



現1階平面図



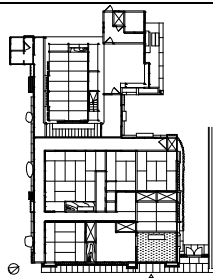
現2階平面図

概要：1階大黒柱以西の居室部は六室で構成されている。最西の10畳間は床の間、付書院を設けている。郵便局が主屋内に設置されていた経緯があり、業務が北側の室で行われていた。2階は東側を大きな一室とし、西側は階段の吹き抜け空間と書斎、座敷、寝室、納戸で構成される。

分析：平面形式は基本的には六間取であり、そこから発展していったものと考えられる。敷地に対して道路に近い側に建物を配置し、奥に庭を取る。主屋は北側に玄関や平床の座敷を持ち、南側に私室を配置していることから、伝統の形式や方位より、道路との関係性に重きを置いて建てられているとわかる。2階は当初は養蚕に使われていた可能性を考慮すると壁は現在より少なく、より一室空間に近かったと考えられる。

表7 石川家住宅（表1中No.8）

石川家：木造平屋建・寄棟造（明治40年）



現状平面図



石川家外観正面

概要：繭糸問屋を営んだ商家であり、主屋、座敷蔵、文庫蔵などを敷地内に配す。防火のための塗籠土蔵造は黒漆喰で仕上げている。主屋の間取は玄関に隣接する部屋から西に中廊下が伸び、座敷列を二分する中廊下型である。

分析：主屋は檜で造られており、縁側の通し丸太、夫婦杉の大板を用いた座敷天井やタガヤサンの床柱などの貴重な材が使われている。主屋玄関の西の部屋は洋間で壁と天井が白漆喰塗りとなっている。天井際にモールディングを設け、照明の吊元を装飾付きメダリオンで飾る。洋風の要素や、材料にこだわった意匠などの近代的な特徴を持つ住宅である。

4 まとめ

4.1 平面形式における近世民家から近代民家への発展

芦澤家、土屋家、内藤家は、近世の平面の前座敷型が発展した形であり、穂坂家、中込家、網蔵家は鍵座敷型を持つものの発展系であると推測する。（図2,3）近世の間取から近代の間取に対しては、四間取についていた板間が梁間方向の前後に区切られて、あるいは座敷側に二室増室されて六間取の形となったと考えられる。

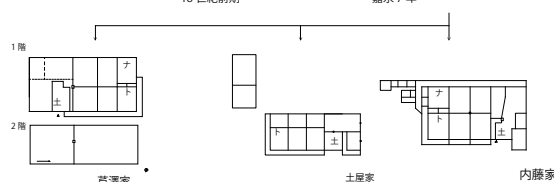


図2 近世の前座敷型からの発展

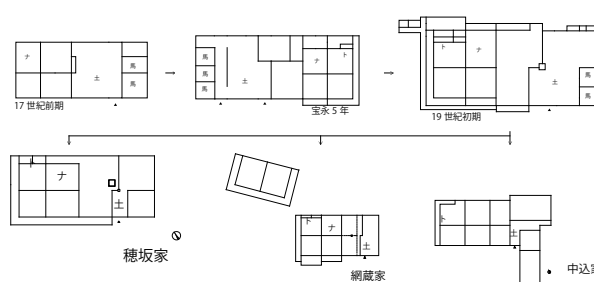


図3 近世の鍵座敷型からの発展

4.2 山梨県近代民家建築の特徴

以上の分析から山梨県の近代民家の特徴を示す。

名取家に見られるような擬洋風の意匠は、明治初期ごろに現れた要素である。山梨県内では明治期の学校建築などが擬洋風で建てられているが、例は少ないものの民家建築まで擬洋風の流れが来ていることが分かった。

その後の明治末期から大正期にかけては洋風の要素が使われるようになる。石川家には洋間があり、装飾に洋風意匠が用いられている。また、同時期に流行した中廊下住宅の特徴を持つ。廊下に接する各部屋の独立性が高まり、どの部屋からも廊下を介して水周りへアクセスできる、より実用的な構成となっている。

近代に建物規模が大型化したことで、2階、3階建てが増えていった。養蚕農家であれば、上階は上族や稚蚕に使われる。これらは時代が下るにつれて養蚕が衰退していったことで用途を失い、居住スペースとして改良されていく例が見られた。芦澤家は腰屋根をつけ、養蚕を一室空間に近い2階で行っていたと考えられるが、居住空間として改築され、現在に至っている。

生業を切り替えるなどして土間で農作業をする必要がなくなった影響で土間は縮小していく傾向にある。近世から近代に進むにつれて土座の空間は徐々に減っていき、近代以降では土間を広くする必要性がなくなったと考えられる。

明治時代以降に木造建築の技術が向上していき、民家建築にもディテールにこだわったものが現れる。川口家は農村の建築だが、農家建築とは一線を画し、戸袋や床板などに工夫が見られるものとなっている。

《参考文献》

- 『山梨県の近代和風建築—近代和風建築総合調査報告書—』山梨県教育委員会, 2015
- 『山梨県の民家』関口欣也, 1982
- 『滅びゆく民家』川島宙次, 1973
- 『山梨県の歴史』飯田文弥ほか, 1999
- 『山梨市史—民俗編—』山梨市役所, 2005
- 『甲府市史—別編Ⅱ—』甲府市市史編集委員会, 1988